

第2回教育交流シンポジウム（教育交流 研究等助成事業）

昨年度「第1回日中教育交流シンポジウム」と言う形で、初めての日中の学生を中心とする教育文化交流を計画し実施しました。今年度は、第2回と言うことで、参加者の定員数を3倍にし、内容も協会の奥石 東顧問の講演を入れるなど工夫しました。日中を中心とする教育文化交流活動を活発化させるための、大きな意味ある取り組みとして「第2回日中教育交流シンポジウム」も成果を上げることが出来たと思います。今年度も日本語作文コンクールへの取り組みとも関連させる中で、日本と中国の若者の意識に焦点を当てて、両国の歴史性を踏まえた関係認識を考えていくそんなシンポジウムとして実施しました。

（1）第2回日中教育文化交流シンポジウム実施計画

1. 実施目的
 - 日本と中国の文化・教育等について語り、交流し、相互理解を深める。
 - 日中両国の文化・教育に対する理解の深まりを、日中両国の友好の礎を担う人材の育成に生かす。
2. 実施日時 2017年（平成29年）2月25日（土） 13：30～17：00
3. 実施場所 日本教育会館801会議室（千代田区一ツ橋2-6-2）
4. 参加者
 - ・日本と中国の青年（中国からの留学生＜15人＞、日本の学生＜15人＞、日本の教職員＜35人＞）
 - ・協会顧問・理事・評議員・賛助会員・関係者・一般10人
 - ・全参加者数76名
5. 講師・コーディネーター・パネラー
 - ・講師＝協会顧問・前参議院副議長 奥石 東先生
 - ・コーディネーター＝日本橋報社・日中交流研究所代表 段 躍中氏
 - ・パネラー＝第12回日本語作文コンクール最優秀賞 蘭州理工大学 白 宇さん
 - ＝第8回日本語作文コンクール受賞者 ビコジャパン社員 関 函さん
 - ＝第9回日本語作文コンクール受賞者 名古屋大学大学院 趙 思蒙さん
 - ＝早稲田大学法学部3年生 高橋 豪さん
 - ＝慶応義塾大学文学部4年生 青山辰之さん
 - ＝郁文館グローバル高校2年生 段エディさん
6. 選定
 - ・留学生については、日中交流研究所やフジ国際語学院等を通じて公募する。
 - ・日本人学生については、日中交流研究所や関係団体を通じて公募する。
7. 内容 協会顧問（奥石 東先生）の講演とパネルディスカッション
8. 日程 シンポジウム
 - 13：30 開場・受付
 - 14：00 開会
 - 14：10 講演「日中交流について（仮題）」奥石 東前参議院副議長
 - 14：50 交流シンポジウムの方向付け（コーディネーター）
 - 意見交流（パネラー）
 - 総括（コーディネーター）
 - 16：50 シンポジウム終了
 - 講評 水岡俊一前参議院議員・元内閣総理大臣補佐官
 - 17：00 閉会
 - ※協会顧問・関係役員・理事・評議員・監査員・コーディネーター・パネラーによる交流会（懇親会）を教育会館内の中華料理店で開催いたします。
9. 経費
 - ・開催の諸経費及び懇親会費用は財団が負担する。

公益財団法人 日本中国国際教育交流協会

【2016年度の歩み 会報第23号】



第2回日中教育文化シンポジウム 第12回日本語作文コンクール

2017年3月発行

(2) シンポジウム内容報告

① 講演

協会顧問・前参議院副議長 奥石 東



奥石 東 顧問

シンポジウムの意義づけをより明確にし、内容を深めていくために、協会顧問であり、26年間という長きにわたって国会・政治の場において大活躍されてきた奥石先生に、「日中交流の意義」について講演をしていただきました。

奥石先生は中国における歴代の最高責任者（毛沢東主席から習近平主席まで）をあげながら、1972年の日中国交正常化以降の大きな動きについて話されました。特に、2006年の胡錦濤・小沢一郎会談を契機として「日中交流協議会」が発足したこと、そして第5回交流協議会は奥石先生が代表を務めたこと等、具体的に話していただきました。今後の日中交流の在り方について、毛主席の「水を飲む人は井戸を掘った人を忘れてはならない」と言う言葉や、「21世紀における人類史的なパートナーとして強靱に連携していく」という胡錦濤・小沢一郎会談の確認、そして、「歴史を鑑として未来に向けて日中国交正常化40周年を祝う行事の成功を推進する」という王家瑞全国委員会副主席と奥石先生との約束事項についても話されまし

た。日中国交正常化から45年となる今日、日中の交流の広がり、とりわけ青年の交流の無限の可能性について話され、日中教育文化交流シンポジウムや日本語作文コンクール等の取り組みについて大いに評価されました。

日中の交流の歴史について、奥石先生の故郷山梨の郷土料理である「ほうとう」と中国陝西省の方言「ホウトウ」の関わりや山梨の郷土の英雄武田信玄公の旗印「風林火山」と孫子の兵法「戦わずして勝つ」のつながり、さらには仏教の伝来等についても話されました。

そして、「世界中が自己中主義的な方向になんとか動いている今日、中国の皆さんと世界の平和と繁栄を求めて手をつないでいかなければならない」と、熱く語られました。そのためには、まずスポーツや芸術という、言葉でなくてもわかり合える国際交流が大切だと強調されました。日本と中国の若者は、スポーツ・音楽・映画・アニメ等いろいろなものを通じて仲良くなれるはずだとも話されました。そして、それらの取り組みを、日本と中国から初めて、やがては東アジア全体に広げていこうと呼び掛けられました。そして、今シンポジウムについて、「お引越しの出来ないお隣同士として、みんなで手をつないでどういう世界を目指していくのか、そのためにはどういう方法があるのか、それを話し合ってもらえれば」と、方向付けされました。「パネリストの皆さんを頼もしく思う。みんなで良い機会にして欲しい。」と、参加者全員に呼び掛けました。講演の結びに、奥石先生が政治家としての信条としてきた、「おれない・逃げない・嘘つかない」という政治姿勢について、また、「子どもに夢を・若者には希望を・お年寄りには安心を・全ての人に出番と居場所がある幸せな社会を目指したい」との思い描く世界像について語っていただきました。さらに、「人間一人では生きていけない。人間強くなければ生きていけない。しかし、やさしくなければ生きていく資格はない。」と、話され、講演を締めくくりました。



日本教育会館8回会議室でのシンポジウムの様子

② パネルディスカッション

パネルディスカッションは、日中交流研究所所長の段躍中氏にコーディネーターをお願いし、中国の若者（日本語作文コンクール受賞者）3名と日本の若者（大学生・中国留学経験者）及在日本中国人の若者（グローバル高校生）1名の計6名にパネラーをお願いして行いました。



段 躍中 さん

段さん（コーディネーター）が、第12回となった日本語作文コンクールの今までの取り組みの様子や成果について、また、第1回日中教育文化交流シンポジウムがどのような経過で開催されることになったのかに触れながら、今回のパネルディスカッションの方向付けをしてくださいました。



白 宇 さん

白さんからは、まず、パネルディスカッションの基調提案として、日本語作文コンクールの最優秀賞（日本大使賞）テーマ＝私を替えた日本語教師の教え「二人の先生の笑顔が私に大切なことを教えてくれた」の発表がありました。（別項参照）

パネラーのみなさんは、段さん（コーディネーター）からの「まず、今日本人について感じていること、思っていること、伝えたいことなどを語ってください。」という問いに対して、以下のように語ってくださいました。

白さんは、まず、「自分が日本語の勉強をすることになるとは夢にも思っていなかった」「受験に失敗して、やりたかった経済や会計の学部が駄目で、日本語の学部になった時は、自分の人生は終わりだと感じた」「周りの人もなんで日本語を勉強するのかと言った」「やる気がなかった、転部することだけ考えていた」と、日本語との出会いについて語りました。しかし、「日本語の先生に出会ってその人間的な素晴らしさから、日本語や日本人・日本について考えが変わってきた」こと、

「中国にいと日本人や日本のことについて触れる機会は少ない、でも、生の日本人と触れ合えば、自分のようにきっとみんなその素晴らしさが理解できると思う」「自分は日本語を学んで、日本に3回も来る機会に恵まれた、そしてそのことから日本がものすごく好きになった」これからも「日本のいいところをもっともっと知って、中国のみんなに伝えるような役割をしていきたい」「日中の懸け橋になりたい」と熱く語ってくださいました。

間さんは、日本について、「自分は日本語を勉強して、日本に来て日本の大学で学んだことにより、日本の高等教育の素晴らしさに驚かされました」と、やはり、生の日本に触れたことによる発見について語ってくださいました。そして、「日本が世界の先進的な技術や力を持っていることを、もっと知らせていきたい」「さらに自分も、日本のことやその高いレベルについて学んでいきたい」と決意を語ってくださいました。また、日本の教育について、「日本の先生の素晴らしさも伝えていきたい。」「日本の先生はやさしさと厳しさを持っていて、まるでドラマの中の先生のように一人一人の学生に寄り添ってくれて、人としてのつながりを大切にしてくれる」と、感想を話してくださいました。



間 函 さん



趙 思 蒙 さん

趙さんは、日本について、「日本に来て、はじめて自分の目・耳・足・心で、本当の日本を感じ取ることができた」と、まず自分が肌で感じたことの大切さについて話してくださいました。そして、「特に日本人の親切さについて感心させられた」「中国の若者達にそのことを伝えたいと思った」と、日本で生活してみても一番感じた「日本人の特徴」について素直に中国のみんなに知らせていきたいと語りました。しかしながら、「最近の日中関係について、今、戸惑っている」「日中は、今、冬の時代だと思う」「でも、春は冬が過ぎれば必ずやってくる」と信じている」「日中関係の改善を、遅い春の訪れを、待っていたい」と希望と決意を話してくださいました。そして、「日本のどこかで頑張っている中国からの留学生を応援して欲しい、温かく見守って欲しい」と、会場の人に呼び掛けました。

高橋さんは、「北京大学へ1年間留学した時、インターンシップでCRI（中国国際放送局）の日本語放送の部所でラジオ放送（61の言語部で行われている）を担当した」と、中国での貴重な体験について話してくださいました。そして「その中でメディアの大きな責任を感じた」「メディアは対立ではなく相互理解の推進を図るべきものだと思う」と率直な感想を話してくださいました。「今、日中関係は冷え込んでいる」「メディアにも大きな責任がある」「メディアが対立の構造を作り出してい



高橋 豪 さん

る面もあると思う」「国営メディアの中に日中交流を目指しているところがある」「CRIでは番組作りの中で、日中関係をよくするにはどうしたらよいか考えていた」と、具体的な体験を通しての驚きについて語ってくれました。



青山辰之介さん

青山さんは、「夏休みの語学研修で2回中国へ行っただけで、豊富な海外経験は無いが」と前置きしながら、大学で中国史を勉強していくなかで、ナショナリズムへの批判と言うことを考えたと言う話をしてくれました。「奥石先生も指摘していたように、今世界が自己中心主義的になってきていると思う」「その根本にはナショナリズムがあると思う」「今、ナショナリズムの批判について、烈士という概念を批判するところから試みて、その絶対性を相対化していきたいと考えている」「国のために命を捧げたとする烈士像というのは、歴史的な形成物だと思う」「かつては国のためではなく、君主のためだったが、ナショナリズムと結びついて、国のために死ぬ＝烈士というイメージが作られたのだと思う」「烈士の存在を知るとナショナリズムがわき上がってくる」「中国での烈士像には、明治維新での吉田松陰・幕末の志士をイメージさせたものがある」「日本の烈士像には、西欧の英雄譚からのきているものがある」「対侵略に対しては、国の為を命を捧げるとする烈士の概念は有効だが、しかし、21世紀のグローバル時代の現在はどうなのか」「抗日戦争記念館の中に烈士として展示されている人の死についても、日本の特攻のとらえかたも、考えていく必要があるのではないか」「烈士象を、きちんと歴史上の形成物としてとらえる分析力を持てば、ナショナリズムの正体が冷静に分析できるのではないか」結論としては、上述のような力を備えていけば、ナショナリズムに翻弄されない新たな歴史観や交流が見えてくるのではないかと話した。

段エディさんは、グローバル高校に在学していて、英語を学びながらニュージーランドやシンガポールに留学した経験の中で感じたことを下敷きとして、国際理解や国際交流について話してくれました。「ニュージーランドは、割と人々がまとまりと過ごしている感じがした。それはニュージーランドの文化で、良いとか悪いとかではないと思った」「シンガポールはしっかりと都市計画がされていた。」「でも、長くそこに住みたい人は少ないと聞いた」「その国にはその国のいろんな面がある」「よそから見ていて抱いている単純なイメージとは違う」そうした中で、これからの生き方として「小さい頃から『日中の架け橋になる』という父親の姿にあこがれていた」「小さいときから〇〇人というレッテルを貼り、決めつけられたイメージを持たれることに違和感があった」「生の中国人に触れてもらいたいし、生のいろんな国の人に触れたい」「フェイスブック、フェイス」「人と人が会うことで友好関係が出来る」「自分は英語を勉強してきているので」「国と国、人と人をつなぐ世界の架け橋になりたい」「奥石先生の『水を飲む人は井戸を掘った人を忘れてはならない』と言う言葉は心に染みだ」「人に恩返しをしたい」「ジャーナリストの仕事につきたい」と話してくれました。

次に、段さん（コーディネーター）からパネラーのみなさんに、「最近の日本の学生は中国へ留学したがるらない。行きたがらない。中国だけ出なくて他の国への留学についても同じ傾向があるらしい。日本人の留学生がどんどん少なくなっている。内向きになっている。日本の若者にもっと留学してもらいたい。これからの日中交流についてみなさんから一言聞かせてください。」という問いにたいして以下のような発言がありました。



高橋さんからは、「作文コンクールの受賞者達の素晴らしい体験を聞いて参考になった」「日本に接する機会が、中国から日本へは沢山用意されていると感じた」「日本から



段エディさん

中国への機会が多くあれば、変わってくるのではないかと」「またいろいろな企画や取り組みの中で、中国や国際交流に触れる機会が多くなるのが大切」という意見がありました。

白さんは、「私は自分のことからしか発表できなかったけれど、みんな多方面から日本をとらえていてすごいなと思った」「中国人の良さをもっと日本に伝えたい」「中国人のやさしさ、伝統や文化など日本の皆さんに伝えたい」「日本や日本人の良さをもっと中国へ伝えたい」と、感想発表してくれました。

青山さんは、「私の発表とみんなの発表はタイプが違っていった」「海外へ行ける機会が持てることはいいことだ」「自分の場合は母子家庭だったし、要介護のこともあったので、長期留学は無理だった」「生活・経済的な理由があって厳しかったので、いろんな支援等が整っていて留学できる機会や条件が整えられれば行きたいし、そういうことが交流に役立つと思う」という感想がありました。

丹波さん（白さんの作文指導者）からは、中国への留学について、いろんな募集やシステムがあること、また、奨学金の内容等の話がありました。「自分は中国の沿岸部（上海大学）なので、生活費等少しお金がかかるが、内陸部や東北地方の大学なら、かなりゆとりある生活が出来る」との発言がありました。

段さん（コーディネーター）から、「奨学金のことがあまり知られていない」「地方へ行くならばより有利な条件で奨学金等がある」という発言があった。

趙さんからは、「奨学金をもらうことが出来てラッキーだった-この機会を大切にしたい-日本に留学できるいろんな機会があることをもっと中国にも広めて欲しい」「日本に留学しての悩みは、日本人の友達がなかなか出来ないこと-日本人と中国の留学生の交流をもっとして欲しい」「ウィーチャットを中国では7億人くらいがしているが、そういうところで若者の交流がしたい。中国では、フェイスブックやライン・ツイッターなどはできないが」

段エディさんは、「マンガやアニメ（君の名は等=若者文化）等の日本の文化の良いところ、工芸品などの中国の文化の良いところ等のきわだっているものを、メディアを通して交流できるのではと思う」

段さん（コーディネーター）から、「会場の参加者からも、日中の若者交流について意見を聞かせて欲しい」という呼びかけがあり何人もの参加者が答えてくれた。

間さんからは、「学費等の経済的な面から留学をあきらめる若者がいる-何とかもってそここのところが変わるといい」「自分の体験として、日本人の学生と2015年にカンボジア・ベトナムへのスタディーツアーに参加した」「中国へのイメージが良くないので、シルクロードなどスタディーツアーから始めてはどうか」

宋さん（フジ国際語学院の学生）からは、「以前に交換留学生で日本に来た。そして今度は大学への留学のために日本に来た、日本への印象が深まっている。日中交流のことでまず感じるのは情報不足ではないかと言うこと、交流をもっとすればもっと良くなると思う」「奥石先生が、生きると言うことは借りを作ることだと言った。私は自分の力で日中交流を進めることでその借りを返したい。」「小学校段階から国際交流の基礎教育をしてはどうかと思う」「交換留学の制度をもっと整うと良いと思う」



初岡昌一郎さん

初岡さん（協会理事・姫路獨協大学）からは、「大学院を目指す場合、社会的な経験を積んでから進学することも大切ではないか」「歴史をとらえていく時に、参考にしてもらいたい一冊の本がある-EHカーの歴史とは何か（岩波書店）という本だ。歴史とは過去と現在の対話だ。過去と未来との対話だとも言える-いずれにせよ価値観から歴史の問題に入っていくことも大切なのではないかと思う」という発言がありました。

金丸さん（山梨県の公立小学校教師）からは、「かつて自分は中国の日本人学校に勤めたことがある。その時のこと、それから中国で自分の目で見たり体験してきたことを今日の前にいる子ども達にしっかりと伝えていきたいと考えている。」「自らの体験を自分の周りの人にしっかりと伝えていくと言うことがまず大切な



丹波さん



宋 漢君さん

ではないかと思う」と話してくれました。

段さんから、「今日のシンポジウムに参加して、いろんな意見発表を聞いて、今考えていることを一人ずつ発表してください。」という呼びかけがあり、パネラーが答えてくれました。

段エディさんは、「日中関係をよくしたい。その為には何をどうしたらよいか、今後の勉強の中でしっかりと学んでいきたい」という発言がありました。

青山さんは、「イメージの作用が大切で、日中関係や中国人・日本人もイメージで判断されてしまう」「サブカルチャーの中で、感情的人間にはより良い感情イメージが終わりになるような取り組みが必要ではないか」「Cポップなどが良いのでは」という意見を発表してくれました。

高橋さんは、「今はまっているCポップはすごく良い理解や交流になるのではないか」「旅行がすごく好きなので世界遺産などいろんなところを訪ねながら、きちんと理解を深め、そのことをみんなに紹介したりしていきたい」と思いますという話がありました。

趙さんは、「金沢に友達が住んでいる。そこにいる日本人の友達と共通の古都イメージができ、それがつながりとして心に残っている」「一人一人の力は小さいけれど、周りの友達とつながると、お互いの国や人々が理解され好きになると思う」という前向きな意見がありました。

間さんからは、「教育の中に交流が必要だと思う。日中のみならず世界の人々の交流が大切だと思う。主要メディアだけでなく様々なメディアを通しながら世界の人々が人生の交流をすることが大切だと思う」という、意見が話されました。

白さんは、「日本語を勉強している中国人が増えていると思う。日本のことをもっと知りたいと思う。自分は日本の女優北川景子さんが好きだ。日本に来て地下鉄の中で彼女のポスターを見た時、やっと会えたと思った。」「ウィーチャットもいいけど、やはり生の交流が大切だと思う。輿石先生も話していた、ピンポンでも何でも、生の交流を通せば、相手への理解がふかまっていくと思う。将来は日本で働きたい。ジャーナリストになりたい。文・記事を書くことで、日本の良さを伝えていきたい。」と、語っていました。

段さん（コーディネーター）が、講評を水岡俊一（前参議委員議員・元内閣官房副長官）に依頼しました。



水岡俊一さん

水岡先生からは、「パネルディスカッションが素晴らしい発言内容で、聞いていて本当にありがたかったです。パネリスト一人一人が、素晴らしいバイタリティーを持っていること、着眼点の鋭さ、また、中国の若者の語学能力の高さ、本当に驚かされました。今日の発言を聞きながら、このパネリスト達のチャレンジとしての多くの目に、大いに期待したいと思いました。人と人の交流を大切にしたい。メディアが世界を変えていく。フェイス ツー フェイス。そんな一つ一つの貴重な発言・意見が、ものすごく重く、感じられ考えさせられました。こんな人たちが、将来の中国と日本の関係を創ってくれるんだと心から感じました。輿石先生が7年前の訪中の折に、日中の人的文化的相互交流の推進という覚え書きを、当時の日本民主党と中国共産党との間で交わしてきました。そのことを大切にしながら、しっかりと日中交流を前進させていこうと考えています。ウェブサイトに、実例や現状を載せていこうと思います。日中関係は、今、残念ながら冷えていると思います。

問題が沢山横たわっていると思います。我々もこぞって、日中交流に努力していこうと決意しています。一緒に頑張って取り組んでいきましょう。」との、力強い講評をいただきました。



金丸 徹さん

基調発表 テーマ「私を変えた、日本語教師の教え」

「二人の先生の笑顔が私に大切なことを教えてくれた」

蘭州理工大学生 白 宇

大学の専門が決まった日のことは今でも覚えている。私が遠く蘭州まで行って日本語を勉強すると聞いて、友達達は皆馬鹿にしたように笑った。両親の「もう一年、浪人して頑張る？」という言葉が、傷だらけの私の心に止めを刺した。

浪人する勇気も無かった私は、入学後、専門を変えることだけに望みを託した。蘭州まで付き添ってくれた母は私の将来を悲観して、帰りの電車で泣き続けたという。2012年、小さな島をめぐる中、中日関係が最悪となった、その年のことだった。

大学の初日、初めての授業にやってきたのは、なんと日本人の先生だった。それまで日本人と聞いて頭に思い浮かぶのは、戦争ドラマで見たあの憎らしい顔だけだった。ところが、教室にやって来たのは可愛らしい女性で、最初はクラスメートだと思った。

教壇に立つと、彼女は知らない言葉で話を始めた。唯一聞き取れたのは「早上好」だけ。英語と、少しの中国語を黒板に書いて交流した。彼女は最初から最後までずっと笑顔だった。なんだ、怖くないんだ、日本人も。授業の後は自分で黒板まで消して、「また明日ね」と言うと、また微笑んだ。

その先生は丹波江里佳と言い、ご主人も先生だった。姓が同じなので、江里佳先生、秀夫先生と名前と呼んだ。先生は「子供みたい」と笑ったが、なんだか親密な感じがして、その呼び方が好きだった。私は、もうちょっと日本語を勉強してもいいかなと思った。

その後、江里佳先生と相互学習を始め、私は日本語、先生は中国語で会話を重ねた。私が大事な試験や試合を控えた時は、先生からたくさんのアドバイスとパワーをもらった。一年が終わる頃、私の成績は学年で一番になっていた。いつの間にか、専門を変えようという気持ちは無くなっていた。

ある日、秀夫先生から呼び出され、江里佳先生が突然帰国することになったと聞かされた。もう、蘭州には戻らない。その瞬間、私は言葉を失い、目からは涙が溢れ出した。他人に弱みを見せることが何より嫌いだったはずの私が、何も言えずに、ただ泣き続けた。ただ一人の日本人の前で、ただ一人の日本人のために。

江里佳先生が帰国した後は、秀夫先生と相互学習を続けた。今だから言うと、最初は江里佳先生には誰も代われないと思っていた。秀夫先生は私達の授業を担当したことが無かったので、冗談を言い合うことも少なかった。やっぱり江里佳先生のほうがいい、とこっそり思った。

去年の5月、蘭州で大きなスピーチ大会が行われることになった。地区予選で優勝すれば日本での決勝に行けると聞き、とてもワクワクした。日本で、また江里佳先生に会える！しかし、参加を決めてから試合まで一ヶ月も無く、まだ原稿も無かった。

思い切って秀夫先生に指導をお願いすると、先生は快く引き受けてくれた。「でも、私が指導する以上は厳しいよ？『全力を尽くす』、それが唯一の、そして絶対に守ってほしい約束」という秀夫先生に、私はドキドキしながら頷いた。

それから毎日、秀夫先生と夜遅くまで練習した。発音から、アクセント、イントネーション、表情、身振り手振りまで、二人で一緒に考えた。試合当日、私の優勝が決まった時、先生は誰よりも嬉しそうに微笑んでいた。その笑顔を見た瞬間に気づいた。秀夫先生もまた、かけがえのない存在になっていたのだ。

東京の決勝では全力を尽くしたものの、結局、私が優勝することはなかった。周囲は決勝に進めただけで十分だと言ってくれたが、内心悔しくてたまらなかった。そんな私の性格をよく知る江里佳先生がくれた長い応援メッセージは、私の一生の宝物になった。

思い返すと涙が出てくる。四年間、私を支え続けてくれた先生方。辛い時、苦しい時、私はいつも二人の笑顔を出す。すると、また次の一步を踏み出す勇気が湧いてくる。今年、私は大学院へ進学する。専門は日本語。今なら相手が誰であろうと、私は胸を張って言える。「私の専門は日本語です」、と。

れた。私たちが始めて日本に来たと知り、すごく驚いていた。「どうやってうちを知ったんですか」と聞かれて、少し笑いながら「実は演歌なんです。浪花恋しぐれが大好きで、その歌詞に横丁が出てくるので」と答えた。話を聞いていた大将も驚いて話しかけてくれた。「ああ、都はるみさんの歌やったっけ、大阪弁がいっぱいやったけど、意味わかりますか」、私は「まあいろいろ調べたんで」と答え、以前から秘かに勉強していた大阪弁を使ってみた。「おっちゃん、これなんぼ」「やりよるな」と、このやり取りに周りにいたみんなが笑った。

歌詞に出てくる「ど阿呆」と「春団治」についても聞いてみた。「ああ、『ど阿呆』やな、『阿呆』のことやで、阿呆をもっときつした言い方やな。春団治はそんなときの落語家で、スーパースターやったんやで」と大将が親切に教えてくれた。寄席囃子は三味線や笛の演奏だということも大将から聞き、「歌詞の中で『呼んでいる』のは、落語家の名前なんですね」と答えた私は、劇場全体が聴衆の笑いに包まれ、みんなが「春団治、ええぞお」と声を上げている情景が目の前に浮かんできた。春団治は妻に支えられながら、一歩ずつ壮大な夢を叶えた。そして、雨の横丁で落語家が傘をさし、二人が寄り添って帰るところも見えてきた。歌に込められた落語家の夫婦愛をようやく理解できた私は、とても温かい気持ちになった。

あの料亭での時間を思い出すたびに今でも何とも言えない感慨深い気持ちになる。最近、日本では「爆買い」という言葉をよく耳にすると聞く。私も例外ではなく、買い物用のスーツケースを二つ準備し、他の多くの中国人と同じように「大人買い」を超える量の買い物を楽しんだ。しかし、急ぎながらいつものデパートを回った後、疲労感が強く残った。せっかく日本に来て、爆買いだけしかないなら、忘れたい思い出を作ることには難しいと思う。日本へ行く時には、その高品質な製品だけでなく、人の心を引き付ける場所にも目を向けてみてほしい。誰でも好きな日本のドラマやアニメがきっとある。その舞台となった所へ行くのはどうだろうか。自分の足でその場所へ行き、その情景を感じる。鎌倉高校前の踏切で、「スラムダンク」のエンディングソングのような写真を撮る。香川県高松市の防波堤へ行き、「世界の中心で、愛を叫ぶ」で二人が見つめていた夕日を眺める。「ラブストーリーは突然に」と一緒に、リカちゃんと完治くんがデートした代々木公園を歩いたら、リカちゃんの優しい笑顔がそこにはあるかもしれない。感性を働かせて「自分の知らなかった日本」を味わうと、「爆買い」では見落としてしまいがちなものを得られるはずだ。私にとって、それは大将や女将さんとの会話であり、その料亭の通りの独特な雰囲気という記憶だ。

一週間の旅行は瞬間に過ぎ去った。荷物も、そしてそれ以上に思い出もいっぱいだった私は、帰国の飛行機に乗るときに、「また来るで」と心でつぶやいた。

公益財団法人日本中国国際教育交流協会

会報 NO. 24

2016. 4. 10

共生力

HP: <http://ajciee.or.jp/>

Tel: 055-269-6533 Fax: 055-269-6534

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内2-32-16

甲府丸の内マンション302

発行人: 黒田文男

第1回日中教育文化交流シンポジウム開催 日中6名の若者が意見発表



(コーディネーター・パネラー・財団関係者記念写真)

教育現場や個人・団体の国際教育交流活動を活発化させるための、「国際教育交流会議(仮称)」のような、取り組みを行いたいというかねてよりの課題を、今年度は「第1回日中教育文化交流シンポジウム」という形で計画し実施しました。

日本語作文コンクールへの取り組みとも関連させる中で、日本と中国の若者の意識に焦点を当てて、両国の歴史性を踏まえた関係認識を考えていくそんなシンポジウムとして実施しました。

実施目的は、「日本と中国の青年が、お互いの国の文化・教育等について語り、交流し、相互理解を深める」「シンポジウムでの発表者の発言を通して、日中両国の文化・教育等についての理解を深める」「日中両国の文化・教育に対する理解の深まりを、日中両国の友好の礎を担う人材の育成に生かす」でした。実施日は、2月27日(土)で、日本教育会館の9階902会議室でおこなわれました。第1回目の基本的な考え方として、「少人数で、より中身の濃い話し合いを持ちたい」と考え、25名



(パネラーによる意見発表の様子)

規模の会場で行いました。参加者の主体は、日本と中国の青年(中国からの留学生、日本の学生、日本の若い教職員)で、他は協会顧問・理事・評議員・賛助会員・一般・マスコミ関係者にも呼びかけました。コーディネーターには、日中交流研究所の段躍中氏を、基調発表者として第11回日本語作文コンクール最優秀賞受賞者の山東政法学院の張農雨さんでした。パネラーには、中国人留学生から、第7回日本語作文コンクール受賞者で英国Leeds大学留学生の郭海さん、第10回日本語作文コンクール受賞者の西九州大学留学生の丁亭伊さん第11回日本語作文コンクール受賞者の西安交通大学の陳星竹さんの3名でした。日本側からは、「中国人の価値観」を翻訳した日中翻訳学院の重松なほさん、早稲田大学日中学生会議の松本晟さんの2人でした。パネラーの選定に当たっては、日中交流研究所のお世話になりました。また、日本の若い教師の参加については、各県教組で呼びかけていただきました。

張農雨さんからは、作文の内容に触れながら、「人のやり方にはそれぞれ原因がある。それをきちんと知れば、いろいろと考えを理解できる。」という話がありました。日本での感想については、「普通の日本人々との出会いで色々な事を学んだ。」「日本人の仕事に対する真剣さを知った。」郭海さんからは、現在英国に留学中と言うことで、日本と中国について、英国にいて思うことが話されました。「日本社会の自由さについて驚いている。」「日本の歴史認識については、英国よりも研究のし



(参加者との意見交流の様子)

ベルが高いと感じている。」丁寧伊さんからは、日本のACG（アニメ・コミック・ゲーム）への興味から入ったことが話されました。その中で、日本をもっと知りたい、日本語を習いたいと発展して、日本語作文コンクール応募や留学に至ったと話されました。陳星竹さんは、現在交換留学生として慶応大学へ通い日本語の勉強をしているそうです。大学では「日中友好フリーハグ」の活動をしていて、自分でポスターを作り、観光客の多いところなどへ出掛けてハグの取り組みをしているそうです。その活動を通して、お年寄りだけでなく日本人みんなの優しさや親切さを感じたことを話してくれました。重松なほさんは、翻訳出版した“中国人の価値観”に触れながら話をしてくれました。「なぜ自分が中国、中国語、翻訳に関わるようになったのか。」という中で、“天安門事件”の直前に両親と北京にいたこと（まだ小学生だった）、その後、現在まで何度も中国を訪れていることなどについて発表していただきました。松本 晟さんは、早稲田大学日中学生会議の活動を通して、「日中の関係を学生の視点で考えたい。」と取り組みを進めている話をしてくれました。日中学生会議は30年間の活動の歴史の中で沢山のOG・OBを排出していて、各方面でその力を発揮してきていることも紹介してくれました。

当初20名くらいの参加者で計画しましたが、当日の参加者は30名以上になり、大変充実した時間を過ごすことができました。シンポジウム終了後、中華料理店で交流会を持ちました。その中で、また日中の教育文化交流が大いに盛り上がりました。そして財団の目指す「人と人の交流を通して相互理解を深める」という目的が、さらに深められたように思いました。

日本語作文コンテスト最優秀賞受賞者“張晨雨さん”が、興石参議院副議長（協会顧問）を表敬訪問！



（参議院副議長室の椅子に座って興石先生との記念写真）

2015年度第11回日本語作文コンクール（日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国の28省市自治区の180校から4737編の応募がありました。最優秀賞・日本大使賞（日本一週間招待）は、張晨雨さん（山東政法学院）の「好きやねん、大阪」が受賞しました。張晨雨さんは来日後とても忙しい日程でしたが、そうした中2月24日（水）当協会の顧問

で参議院副議長の興石 東参議院議員を表敬訪問しました。副議長室での歓談・国会見学等大感激していました。

～ホームステイ参加者も進学～ “フジ国際語学院卒業式”

3月3日、フジ国際語学院（山中小白代表・財団評議員）の卒業式が行われました。担任による卒業生の呼名、代表者への証書の授与の流れの中で、先生方と学生達とが喜びの交歓に包まれる素晴らしい卒業証書授与式でした。後半の学生たちの主体的な取り組みによるパフォーマンスも、まことに感動的なものでした。代表者のスピーチにも「私たちが、日中友好の架け橋になるんだ」という決意が感じられました。一昨年・昨年、教育交流ホームステイに山梨に参加した学生たちもそれぞれ進学しました。ホームステイでの体験を、今後の学生生活の中で生かしていってくれると思います。



（卒業証書授与式の様子）

第24回理事会・第13回評議員会で来年度事業計画・予算が決まりました

3月8日（火）に、財団の第24回理事会が、日本教育会館8階808会議室で開かれました。理事・監事・顧問の出席を得て、2016年度事業計画（山東省泰安市東平県への教育交流計画・ホームステイ事業・シンポジウム開催等）並びに2016年度予算（総額8,910,000円）が慎重審議の後に、可決されました。また、賛助会員の獲得等の財政確立の取り組みについても決定しました。理事会の決定を受けて行われた3月18日（金）表決の第13回評議員会においても、原案通り決定されました。



（教育会館会議室での第24回理事会の様子）